

隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第58回

森の彫刻家 上床利秋

生きていた証を残したい



「発達支援センターなかもセンター長像」 著者制作
ブロンズ像 桜島溶岩製

●溶岩台座に「子供たちの健やかな成長を願って」という理事長の願いを刻む

母が朝早くから電話をかけてきた。

新聞の死亡広告欄に、私がこの前建てた銅像の婦人の名前があるという。それが事実であることを確かめた私はその日の夕方通夜にかけた。かくしゃくとされていたのでその方の訃報が飛び込んでくるなどとは、私は思っていなかった。コロナ禍で銅像除幕式も中止となり、その人自身の感想も聞いていなかった。

遺族代表の松村氏によると、どうやら婦人は一年半ほど前から不治の病を患っていたそうである。独身を貫いて公務員管理職だったキャリアを持つ婦人は、生前からよく自分の生きてい

た証を残したいと願っていた。それを知る親族は本人の寿命がそう長くないことを伏せて私にブロンズ肖像制作を依頼されたようである。

僧侶がお経を唱えてく

ださっている間、私は生前婦人と初めて面会した日のことを思い出していた。思えばコロナ感染予防という事で本人には近くに寄らせてもらうことも制限されての粘土原型制作だった。婦人をよく知る周辺の人々はおおかた似ているという感想をくださった。しかし本人は、もっと若く、優しく、美しい顔の像にしてほしい願いが強かった。そこでもっと笑顔の表情を改めて撮らせてもらったの再制作をすることになった。

こういう希望を持つ依頼人の要望には際限がない。それは似ていることよりも理想のカッコイイ像になること

の方が喜ばれる現実。しかしながら作家としての感性を曲げてまでへりくだる制作に彫刻芸術の価値はない。この葛藤は制作意欲を減退させる。そうはいつても本人が喜んでくださった。そのそのプロの仕事であるはずだ。私はいつもの幅広い観察と緊張感で婦人の像を良心的に造り上げた。

銅像が設置された際、周辺の方は私の労をねぎらってくれたが、その後婦人がどういふ感想を持たれているか真実がわからないままになっていたのだった。親族の方が私の気分を害するような発言をされるはずがなく、本人の気持ちを確かめるのは直接お会いして、その表情から読み取るしかないと考えていたからだ。だから、制作は努力したけれど、残念な気持ちも残っていたままになっていた。ところがお通夜の席で親族の方から私に婦人の最後の様子を聴くことができた。

婦人は病室に銅像建立された自身の写真を飾り、訪れた来客に嬉しそうに紹介されていたそうである。それを聞いたとき、はじめて私は今回の仕事に成功したように思えた。

良き思い出に変わった瞬間だった。だれだつて自分をよく思われたい気持ちはあるだろうし、ましては銅

レモン画材絵画教室 ご案内

- 隔週水曜日 10:00～ 油絵・水彩教室
- 隔週土曜日 16:00～ 油絵・水彩 教室
- 隔週日曜日 16:00～ デッサン
- 隔週土曜日 ①10:00～ 子供絵画教室
②13:30～
- 月1回 第2火曜 10:00～
和紙ちぎり絵教室



お申し込みは TEL 0995-45-1015
国分進行堂・レモン画材まで

この森のアトリエで彫刻を
共に作ってみませんか

御感想をお寄せ下さい。

<https://douzou.jp/>

上床利秋

検索

バックナンバーも読むことができます。



日展会員 白日会会員 日本彫刻会正会員

もしも自分自身に死期が迫っていることを知った時、自分ならば何をやるだろう。

像が自分の最後の姿だと認識すればワガママもわかかってあげるべきだと思えたのだった。